

04

8年以上にわたり休みなく運行し 35万人が乗車した南三陸の語り部バス

南三陸ホテル観洋



MIYAGI
MINAMI-
SANRIKU

南三陸ホテル観洋の語り部バスは、東日本大震災直後から運行を開始し、2019年1月までに延べ35万人の乗客を乗せた。その実績と、ホテルの女将の教訓を伝えなければとの思いによって、語り部バスは東北被災各地の語り部をけん引する存在になっている。語り部バスが伝えようとしているものとは、何か――。

代表者 阿部 憲子氏(女将)

所在地 宮城県本吉郡南三陸町黒崎 99-17

TEL 0226-46-2442

WEB <https://www.mkanyo.jp/>





被災直後、ホテルが命を守るとりでになった

南 三陸ホテル観洋(以下、ホテル観洋)は1972年の開業で、現在の女将、阿部憲子氏(以下、阿部氏)の父親、阿部泰児氏が開業した。泰児氏は、三陸海岸を中心に襲した1960年のチリ地震津波を経験しており、防災意識が高かった。ホテル建設に当たっては、景観だけでなく高台の地盤が強固な土地を選んだという。そのおかげで、東日本大震災では、ホテルの2階まで津波で浸水したものの、地震による被害は軽微で、売店の商品が棚から崩れ落ちることもなかった。

建物がほぼ無事であったことで、周辺住民がホテル観洋に避難。孤立状態に陥ったホテルには、宿泊客、ホテルスタッフと合わせて、350人が滞在していた。翌日も避難者を受け入れ、600人以上が滞在中で、阿部氏は、ホテルを“命を守るとりで”とし、町の支えとなることを決意した。

ホテル観洋には、多くの住民が避難してきたが、指定避難場所ではなかったため、救援物資が届かず、物資の確保に苦労しながら避難生活を送ることになった。また、3月下旬からは、多くのボランティア団体がホテルを拠点に活動したほか、医療関係者にも部屋と食事を提供した。5月5日によく二次避難所に指定され、地域住民600人を受け入れた。この時期、ライフラインの復旧も完全ではない中、医療・復旧工事関係者等を含め最大で1,000人を受け入れていた。阿部氏は、その先頭に立って指揮を取っていたのだ。「東日本大震災直後、余震も続く中で、まずは命を守ることが最大の使命でした。地震発生のその日のうちに、食材の在庫を確認して1週間分の献立を決め、提供していきました。その中で、宿泊のお客さまも無事に帰路につき始め、震災から7日目の3月17日に、全員のチェックアウトが完了しました。

次に、南三陸町を守る、そのけん引役にならなければいけないと考えました。宿泊産業は経済効果の裾野の広い業種で、

語り部バスは希望者が一人でもいれば運行される



高台の岩盤の上に立つ南三陸ホテル観洋。目の前には志津川湾が広がる

着眼点

個人で乗れる語り部バスが再訪者を呼んだ

南 三陸町は、津波により町の中心部の約8割が流出し、道路も標識も信号も失っていた。東日本大震災直後から町に入った人々の多くが、道案内をホテル観洋に依頼。ホテルのスタッフが、来訪者が乗ってきたバスに同乗して道案内した。スタッフは、自然と「この場所では、こんな出来事がありました」とか、「あの建物のあの高さまで津波が来ました」という話をするようになった。——これが、語り部バスを運行するきっかけだった。

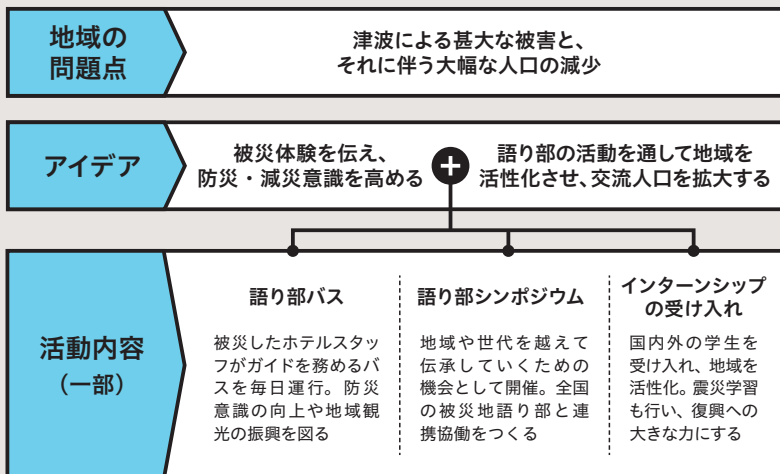
2011年8月31日に二次避難所としての役割が終了して以降は、一日も休まず、スタッフが案内役として同乗するバスが南三陸の町を走った。2012年2月からは、「震災を風化させないための語り部バス」とネーミングし、団体・個人を問わ

町内には私共との取引がなくなってしまうと営業が立ち行かなくなるような業者さんもいますし、廃業を考えていた業者さんもいました。『すぐにでも営業も考えないといけない』と思い、いまだ断水が続いていましたが、4月23日から、思い切ってレストランの一部の営業を再開させました。こうして私たちが動き出したのを見て、『観洋が始まるんだっつら』と、思い直してくださった業者さんも多くいました。たった一軒のホテルにすぎませんが、少しは町の経済の支えになれるんだと実感しましたし、『われわれも、もっとがんばらないといけない』と覚悟を決める局面でもありました」(阿部氏)。

その阿部氏の使命感と覚悟の下、スタッフも奮闘し、7月24日には一般の宿泊客の受け入れを再開し、9月には客室稼働率が震災前と同水準にまで回復した。南三陸町にとって、それは、復興に向けてのまさに大きな支えとなった。



震災を風化させない「語り部バス」で地域を活性化



ず、また、ホテルの宿泊者以外も乗れるバスとして運行している。「バスに同乗していると、『ここは以前から野原だったんですか』と聞かれます。とんでもありません、そこには、家があり、人々の暮らしがあったんです。でも、初めて南三陸に来た方が知らないのは当然です。ですから、きちんと、私たちが伝えなくてはいけない。知ってほしいことがあるのだから、私たちの方から語りかけなくてはいけないんだと、強く思いました」(阿部氏)。

阿部氏には、もう一つ気付いたことがあった。宿泊客がタクシーの手配を頼む際、フロントは行き先を確認するのだが、客のほとんどが言いよどむのだ。「ああ、これは、きっと被災した地区を見に行きたいのだろう。行き先を言いにくいのも無理はない」と察した阿部氏は、一人でも語り部バスに乗れるようにすることを決めた。

東日本大震災・津波の経験を伝える語り部は、被災地の各地にいて、それぞれの形態で活動している。しかし、個人の参加を受け付けているところは、2012年の時点でほとんどなかった。その中で阿部氏の決断は画期的であり、結果的にホテル観洋の語り部バスを今日まで継続させる大きな要因となった。

阿部氏によれば、企業ボランティアなどの団体の一員として訪れた人が、短い期間のうちに再訪するケースが目立つという。語り部の話に感銘を受けた人が、次は、話を聞かせたいと思う相手を持ってくるというのだ。これは、個人・少人数グループの乗車を受け入れたことの思わぬ効果だ。

現在、語り部バスは、ホテルを朝8時45分に出発して3カ所程度の被災地域と震災遺構を回る、約60分のコースで運行している。宿泊者の場合、前日の夜9時までに申し込みれば乗車でき、料金は大人1名、500円。たとえ希望者が一人であってもバスは運行される。ホテル観洋は、



① 復旧・復興に向けた工事が続く南三陸町。献花台には今も花が絶えない ② 震災遺構「高野会館」。津波は4階近くにまで達した ③ あの日のまま止まる元戸倉中学校の時計

2

3

連携・協働



全国の被災地の語り部のネットワーク化も進めた

東日本大震災以前から緑ナンバーの大型バスを所有しており、ホテル自身でバスを運行して、参加しやすい仕組みにしたことが、8年以上にわたって乗客が絶えない大きな理由の一つなのだろう。

一方、語り部の資質の向上も怠ってはいない。語り部バスの運行開始以来、メンバーの入れ替わりはあるものの、8人ほどのホテルのスタッフが交代で語り部を務めているのだが、みんなで勉強し、最新の情報を共有し合っているという。

語り部

語り部バスの運行が始まってから1年ほどがたったころ、阿部氏は、語り部の一人から思いがけないことを聞かされる。「何を話しているのか分からなくなった」というのだ。

その頃、南三陸町では、復興に向けて被災した建物が次々と解体されていた。阿部氏は、「震災遺構の前に立てば、語り部が語らなくても、何が起こったのキャリアに伝わる。その震災遺構がなくなりつつある今、私たちの伝える力をもっと高めていく必要がある」と思った。そして“先達”に学ぼうと、「震災の語り部」活動を続けている北淡震災記念公園(兵庫県淡路市)に連絡を取った。この、東日本大震災の語り部と阪神・淡路大震災の語り部の出会いが、やがて大きな流れを生み出していくことになる。

2016年3月、「全国被災地語り部シンポジウムin東北」が、約330人の参加者

国内外からインターンシップを受け入れ、交流人口の拡大を目指す



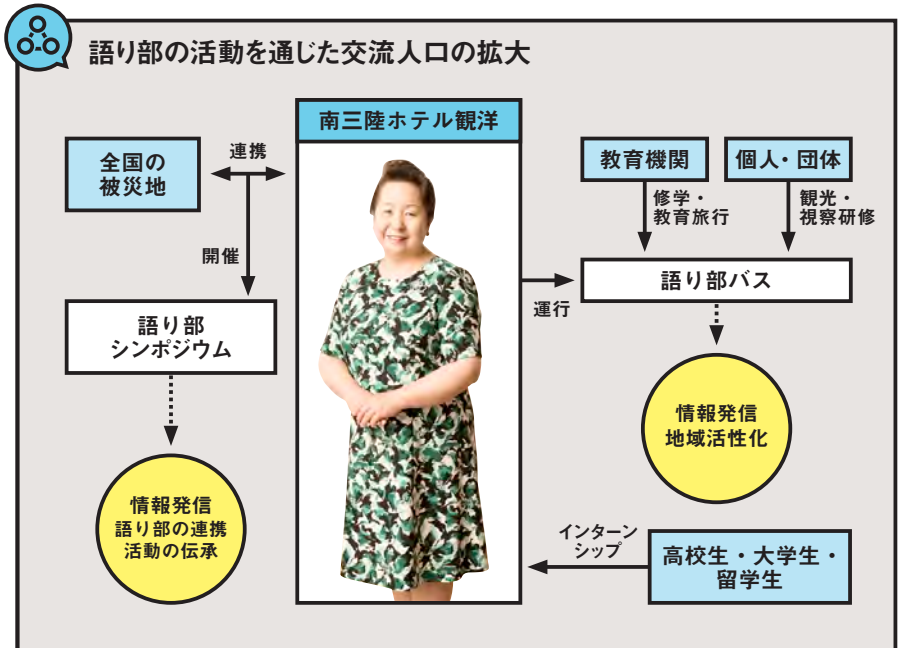
を集め、ホテル観洋で開催されたのだ。そして、全国の語り部が交流し、「命を守るため次世代、社会に広く伝える活動の実践」や「防災・減災・縮災を広げていくこと」などを『全国被災地語り部宣言』として発表した。

その後、このシンポジウムは、東日本と西日本を交互に会場にして回を重ねている。2018年2月には、第3回シンポジウムが、『『KATARIBE』を世界に』をテーマに、再び南三陸町を会場に開催された。熊本を会場とした2018年12月の第4回は、台湾からも参加があり、「国際シンポジウム」に発展している。

自身が力を入れて取り組んだ語り部のネットワーク化を振り返り、阿部氏は、次のように語る。

「いろいろと勉強していく中で、全国各地には、忘れないようにするための様々な工夫、先人たちの知恵があることが分かりました。それらを学ぶことは、その中からヒントを得るだけでなく、今後の活動の参考にもなります。

そして、全国の皆さんと交流する中で改めて強く認識したのは、語り部の役割の重要性です。東日本大震災でも、その



他の災害でも、本当は助かる命がたくさんあったのに、救いきれませんでした。そこから学んだことを広く知らせ、次の災害のときに一人でも多くの命を救うことが、私たち語り部の使命なんです」。

阿部氏は、このシンポジウムの他にも、「三陸被災地語り部座談会」や「東北

被災地語り部フォーラム」を開催し、語り部文化を根付かせ、発展させることに力を注いでいる。そんな阿部氏に、東北各地の語り部から「これからは観洋さんになんばってもらわない」という声が多く寄せられているという。ホテル観洋の語り部の取組への期待は大きい。

PLAYER'S INTERVIEW



女将 阿部 憲子

東日本大震災発生時には自社も被災する中、周辺住民の避難を仮設住宅へ移るまでの180日間にわたって受け入れた。子どもの学習支援を行うほか、「南三陸キラキラ井」を発売し、地域活性化に尽力している。

目指すゴール



語り部の活動を続けることで、震災を風化させず、防災意識を高め、教訓を未来へとつないでいく。また人口が減少している南三陸町の交流人口を増やし、住み続けられる地域をつくっていく。



語り部バスは、交流人口増加の原動力になっている

東日本大震災以降、若い人ほど町を離れ、南三陸町の人口は震災前の4分の3程度になり、当ホテルの従業員も約260人から50人も減ってしまいました。町の将来を考えると、定住人口を増やすことが不可欠ですが、まずは交流人口を増やすことが当面の課題です。

語り部バスでは、被災時のことだけでなく、その後の復興の歩みもお話しさせていただいており、南三陸町の今の姿を発信する意味合いも持っています。語り部バスは、地域の交流人口を生む原動力にもなっているのではないのでしょうか。

当ホテルはインターンを積極的に受け入れ、交流人口の増加と、その先の働き手の確保を図ろうと考えています。以前、インターンに来ていた若者から、「北海道胆振東部地震に遭遇し、ホテル観洋で学んだことが非常に役立った」という話を聞きました。南三陸町からの情報発信が、語り部のネットワークを通じ、あるいは、語り部バスに乗りしたりインターンに来てくれたりした交流のあるたくさんの人々を通じ、横に大きく広がっていることを実感しています。これからは、この交流が横に広がるだけでなく、時間的にも広がっていき、10年後、20年後の南三陸町の支えになってくれることを願っています。さらに、50年先、100年先の命を守ることに繋がってほしいことを祈っています。